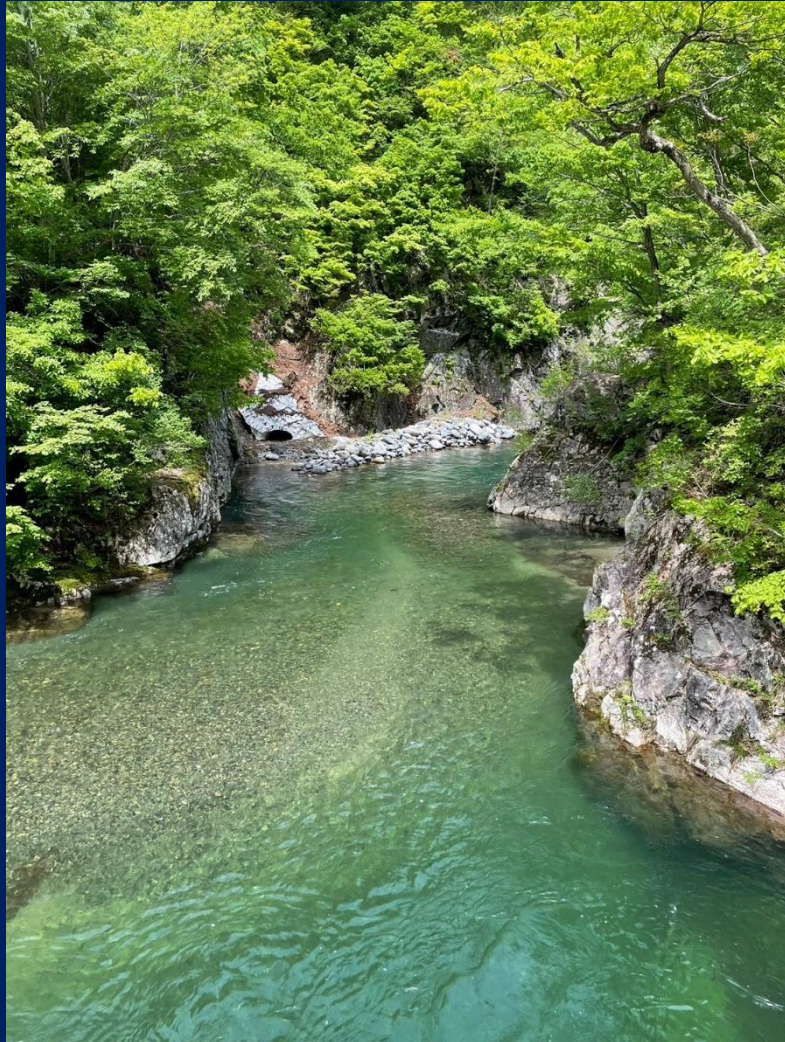


## 雪代残る春の源流釣行

### ～雪渓崩落と水難事故とチーズケーキ～



[報告者]：内野繁樹

[釣行日]：令和6年5月25日～26日

[参加者]：大貫和之、黒須悠輔、長谷部寿一、内野繁樹

今回の釣行は大部分が平坦な林道歩きでハードな山超え等がなく、山菜を採りながらのゆったり釣行ということを知っていた。源流原理主義者の黒須君がリーダーである釣行でそんなことがあるのだろうかと思信半疑ではあるものの、シーズン序盤の足慣らしにはちょうどいいかもしれないと思い参加させていただくこととした。場所は溪遊会へ入会する

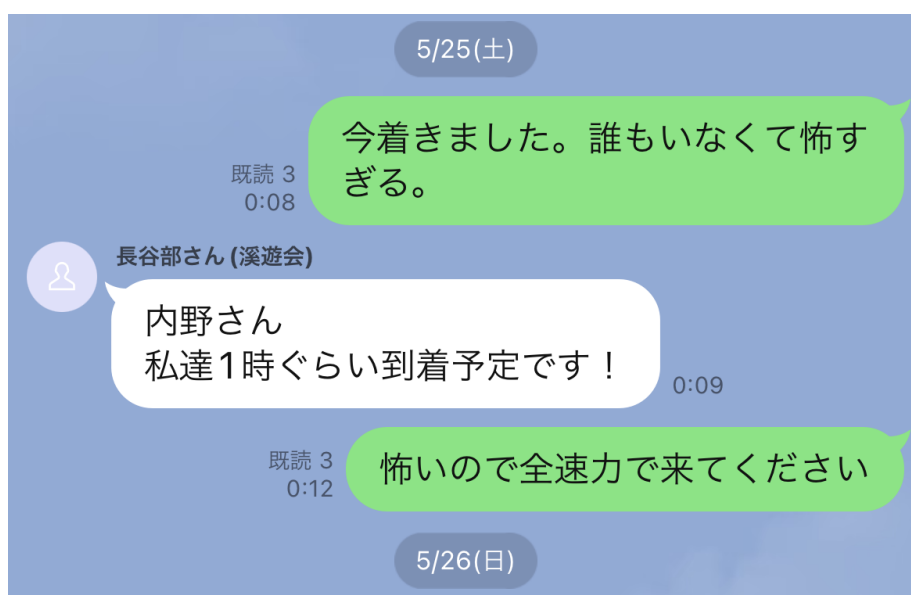
前からよく1人で釣りをしていた馴染みのある地域の深淵部への釣行だったため、個人的に非常に楽しみにしていた。また、メンバーは黒須君の他は大貫さん、長谷部君ということなので、昨年7月に片道11時間のハードな釣行で苦楽を共にしたメンバーとまた釣行できることを嬉しく思った。



昨年の片道11時間のハードな釣行時における長谷部君。今回の釣行とは全く無関係の写真。

1週間前に黒須君より釣行計画が送付され、今回の釣行でも前日夜には当然のように前夜祭が開催されるとの記載があった。釣行前日の真夜中にわざわざお祭りをしなければならない合理的な理由を今でも見つけることができてはいないが、何せ私は入会2年目の若輩者なので決定事項には従うのみである。集合場所となるダム駐車場に0時に集合とのことだった。「嫌だなあ…」集合時間を確認した時の私の呟きである。何が嫌なのかというと、集合場所に到達するには必ず有名心霊スポットを深夜の時間帯に通過しなければいけないからだ。私は幼い頃から非常に怖がりであるにも関わらず怪談話が大好きなタイプである。今でも心霊系の動画をよく観てしまい、夜に家で1人の時は全ての電気をつけていないと家に居られない程である。集合場所に向かう道中、頼りないヘッドライトの灯の中

に浮かび上がる山道は本当に不気味なもので、見てはいけないものを見てしまうのではないかと恐怖から思わず目を閉じたくなるが、運転中なのでそうするわけにもいかない。私は溪流釣りという趣味を続ける限り、熊との遭遇と心霊体験は早晚経験することになってしまうのではないかと本気で思っている。恐怖心に打ち克つため、大音量で田中星児のビューティフルサンデーをリピート再生しながらやっとの思いで集合場所に到着したのだが何やら様子がおかしい。真っ暗なダムの駐車場に先に到着してしまわないように集合時間より敢えて10分程度遅れて到着するよう調整したのに、どうやら私の方が先に到着してしまったようだ。軽いパニックに陥ったものの、携帯を見ると電波はあるようなので、即座にグループラインで到着の連絡を行った。すると、長谷部君から「1時くらいに到着します!」との返信があった。「ふざけんな、怖いだろ!」と携帯の画面に向かって大声で叫んだが、こういう時こそ冷静にならなければならないと自分に言い聞かせ、今できることは何かと頭をフル回転させた。電波があるならお笑いの動画でも観ながら気を紛らわそうと動画アプリを開いたが、普段から心霊系の動画を見ることが多いことからお勧め動画に数々の心霊系の動画が上がってきてしまった。不気味なサムネイルが目に入り、怖すぎて車の中で1人で思わず涙目になってしまった。その後、体感的に非常に長い約40分が経過する頃に遠くの方からこちらに近づいて来る灯を確認したが、あれが車のヘッドライトじゃなかったとしたら自分はどうなるんだろう、とかいろいろな思考を巡らせている間に無事3人を乗せた車が到着した。そこから前夜祭が3時くらいまで続いたが、何だか非常に疲れた釣行前夜となった。



危機的状況に追い込まれたうえ、遅刻の報告にも関わらず感嘆符をつける非常識さに私の怒りも頂点に達することとなったLINEのやり取り。



前夜祭会場を設営する遅刻してきた3人。この時私は若干不機嫌だったため、設営には加わらず彼らとは一定の距離を置いている。

翌日は6時起床、6時半出発という比較的マイルドなスケジュールだった。ここからテ  
ン場予定地まで約4時間の林道歩きだが、山菜を採りつつなのでおそらく5時間ちょっ  
とはかかるだろう。5月の末とはいえ、標高の高い豪雪地帯なので林道入り口から早速雪  
溪に出迎えられる。雪溪は危ないということをよく聞くが、目の前の雪溪は見た感じか  
なり  
の大きさだ。こんなしっかりとした厚さのあるものが崩れることはないのではないかと思  
いながらも、黒須君、大貫さん、私、長谷部君の順で一応は注意深く雪溪上で歩みを進め  
ていた。すると突然目の前を歩いていた大貫さんが私の視界から消えたのと同時に、バ  
ターン！ともものすごい音が辺りに鳴り響いた。あまりに一瞬のことで呆気にとられたが、雪  
溪が崩落したのだと理解した。これは大変なことになったかもしれない、と恐る恐る下を  
覗き込むが、意外なことに大貫さんは全くの無傷だった。3メートル程度落下して無傷と  
は本当に幸運なことだったと思う。仕方なく、一度雪溪から降りることとなったのだが、  
最後の一步の足場がないので1メートル程度ジャンプして降りなければならなかった。重  
たいザックを背負っているので、1メートル程度のジャンプでもなかなかの衝撃を足に受

けることとなる。慎重を期してジャンプし、なんとか無事降りることができたと胸を撫で下ろしていると、後ろで「ああっ！」という声をした。思わず笑ってしまったが、長谷部君が着地に失敗し足を痛めてしまったらしい。しかし、一応歩くことは問題なさそうだということなので先を急ぐこととした。この時、長谷部君のことを心配していた者は1人もいなかったのだが、後日、関節内骨折との診断を受けたという連絡があった。そんな状態でよくあれほど長距離の林道歩きができたものだ。多分、メンバーに心配かけまいとかなり精一杯だったことだろう。意外な程の根性の持ち主であることが分かり、少しだけ彼のことを見直した。



アーチ部分が崩落した雪渓。こちらは崩落時を再現した完全なやらせ写真。

雪渓を通過した後しばらく歩いていくが、今回の釣行の大きな目的の一つである山菜が全く見当たらない。このままでは今日の夜は寂しい宴になってしまうのではないかと心配し始めた頃、山菜採りから戻ってきたという初老の先行者とすれ違った。収穫袋を見ると相当な量のウドが入っていた。まさか根こそぎ取られてしまったのではないかと不安になり、「この強欲者め！」と心の中で罵り、挨拶もそこそこに再び先を急ぐこととした。その後も行けども行けども山菜が見当たらず、代わりに林道入り口にあった雪渓より遥かに巨大な雪渓が現れた。滑落したら恐らく命はないだろうというプレッシャーを感じながらの雪渓歩きはなかなかの緊張感だった。そう言えば、今回は平坦でゆったりした林道歩

きだったはずだが。この時、私の中で黒須君への若干の不信感が芽生えていた。



長谷部君と私が豆粒に見えるほどの巨大雪渓。滑落は許されず、緊張で足が竦む。

巨大雪渓を通過すると、いよいよ山が深くなっていった。斜面を見上げるとちょうど食べ頃の極上のウドが何本も生えており、先行者が根こそぎ収穫してしまっていないことが確認できてひとまず安心した。そもそもこの規模の山で山菜を根こそぎ採ることが不可能なことくらい普通に考えれば分かることだが、日常とは全く異なる山の世界では正常な判断ができないこともある（＝自身が強欲なのではない）と整理することとした。



時季外れの落の臺を収穫する大貫さん。 斜面に生える極上ウドを収穫する黒須君。

極上ウドの収穫に夢中になりながら歩いていくと、気がついた時にはテン場予定地に到着していた。大体5時間程度の道程だったと思うが、昨年7月のテン場まで片道11時間のハードな釣行を経験しているからなのか、これでいいのだろうか？という意味不明な自問自答をしてしまった。そして、片道11時間は異常であって、片道5時間もまた十分に異常である、従って、溪遊会は異常者の集団である、という正常な結論を導き出した。

テン場到着後、首尾よくタープを張り、薪を集めて乾杯を行なった。気持ちのいい初夏の日差しを浴びながら飲んだビールはとても美味しかった。その後にいよいよ釣りだ、というところで、長谷部君が「足が痛いので釣りは止めておきます。」と言い出した。この時は、実は関節内骨折という重症となっていたことなど誰も想像していなかった。大貫さんから、「どうせ軽い捻挫のくせに大袈裟にするんじゃない！」と実に昭和スタイルのお手本的な精神面の指導が行われたのだが（実は肉体面の指導も少し行われた）、とりあえず長谷部君にはテン場で休んでいてもらい、私と黒須君は上流へ釣りに行くこととした。大貫さんはテン場の前の流れで釣るという。なんだかんだ長谷部君を心配してのことだろう。



テン場での乾杯風景。天候にも恵まれ最高の瞬間。

テン場から少し上流に移動したところから釣りを開始したが、雪代が混じって水量が多いながらも驚く程の入れ食い状態だった。黒須君は餌釣り、私はフライという釣法なので、お互いの釣法に適した流れを譲り合ってテンポよく釣り上がり、実釣3時間程度だったが2人で30匹は優に超える釣果だった。どの魚も豪雪地帯の厳しい流れに磨き抜かれた美しい魚体で型も申し分ない。そんな中で黒須君の竿に一際大きい一尾がかかったが、数分の格闘の末に水面から顔を出すと同時に惜しくもバレてしまった。後で動画を見返すと40センチを超える大物だったように思える。釣り上げることができなかったのは残念ではあるが、ロマンを感じる大イワナの存在を確認し、また来年この川を訪れることのモチベーションとなった。





雪代の入る強い流れから出てきてくれた美しいイワナ。

大物をバラしたところで、いい時間にもなったのでテン場に戻ろうということとなった。何箇所か渡渉しなければならないところがあるのだが、雪代の混じる太い本流の流れの渡渉は一苦労だ。豪雪地帯の5月の流れの水温は氷水のように冷たく、転倒したら間違いなく大変なことになる。黒須君が先行し、強い流れの中を軽々と進んでいく。え、そこ行くの？という強い流れをどんどん渡渉していくため、私は必死の思いで後をついていった。膝上くらいの強い流れに差し掛かった時、何だか嫌な予感がしていた。黒須君は先に渡渉を終えており、「行ける、行ける！」と私に向かって笑顔で叫んでいる。ここで巨大雪渓を渡っている時に芽生えた黒須君に対する不信感を思い出した。対岸の笑顔の男を本当に信じていいのか？結論を出すのに十分な時間と客観的な材料が不足しているが、ここを渡らないとテン場には戻れないというのは紛れもない現実だ。納得感のないまま勇気を出して一步を踏み出した瞬間、目の前の世界がスローモーションとなった。そして視界には青空だけが広がっていた。なんて綺麗な青空なんだろう。まだ5月なのにまるで8月の

ような濃い青だな。あれ、あの大きい鳥はなんていう鳥だろう。そういえば、昨日の夜フクロウが歩いていたと黒須君が言っていたな……。

私は背中から着水し、そのまま数メートル流されてしまった。「大丈夫ですか?!」と黒須君に引き上げられた時に、今のは結構やばかったんじゃないかという状況を認識してぞっとすると同時に、決してこの男を信じてはいけないという結論に到達していた。しかしながら、文字通り彼は私の命の恩人であるため、私の中での黒須君の人間性の評価についてはプラスマイナスゼロ、ということにした。すぶ濡れになってしまった恥ずかしさと寒さから、そこからしばらく私の口から言葉が発せられることはなく、テン場に到着するまで2人の間に非常に気まずい空気が流れることとなった。



水遊びをしていた46歳の会社員（男性）が流された水難事故の現場写真。

テン場に到着すると大貫さんと長谷部君が寛いでいたが、長谷部君の足は思っていたより深刻な状況のようだ。目と鼻の先にある流れでいくらでも釣りができるのだが、全く竿を出していないらしい。とはいえ私も人のことを心配していただける状況ではないので、早々に濡れた服を脱ぎ捨て、乾いた服に着替えを行い焚き火に当たって体を温めた。少し落ち着いてから宴会が開始され、品性と内容が全くない話をしながら久しぶりに食べるイワナの刺身、山菜料理はとても美味しく感じた。なお、今回は黒須君により持ち込まれた電動泡立て器を使い、パティシエである長谷部君によってかなり本格的なチーズケーキが振る舞われることとなった。源流釣行において電動泡立て器より優先すべき装備はいくらでもあると思うが、電動泡立て器は源流の必須装備なのではないかと錯覚させるくらい完成

したチーズケーキは感動的な美味しさだった。その後は疲労から 21 時過ぎには目を開けていられなくなり寝てしまったが、23 時くらいに何故か黒須君に叩き起こされて軟骨の唐揚げを強制的に喫食させられた。そしてその直後にまたすぐに眠りに就いてしまった。



電動泡立て器でクリームチーズを泡立てる長谷部君。大貫さんは源流では常に長谷部君に対して直接的な指導が可能な距離を保っているため、長谷部君の写真を撮ろうとすると必ず大貫さんが構図に含まれることとなる。



完成したチーズケーキ。正にプロの味だった。



源流での私の定番メニューとなりつつある  
クラムチャウダー。

朝起きると、時刻は既に9時を回っていた。予定では7時には起きているはずだったが、寝心地の良いテン場と少し寒いが快適な気候のせいで思いの外よく寝れてしまったらしい。とりあえず、時間は元には戻らないし、みんなそれほど急いで帰る必要もないということなので、ゆっくり朝食をとりテン場を片付けて11時に出発した。2日目も天気が高く、青空と新緑のコントラストが美しかった。帰り道でも山菜を採りつつ、釣りをしつつで、出発地点の駐車場に到着したのは17時前くらいだった。



朝食の調理風景。寝坊してしまったが誰も急ぐ様子はない。



とてもいい香りのウドの混ぜご飯。



いつもながら、源流で食べる朝食はとても美味しい。



帰り道で尺イワナを釣り上げた黒須君。



黒須君が釣り上げた見事な尺イワナ。強い流れの中を生き抜いた証である力強いヒレ。



私「もっと右の筋だな。」 黒須君「……（うるせえな）。」



林道の斜面には極上ウドが自生。



5月末にも関わらず満開の藤の花。



ゴール付近で足が痛くてもう歩けないと駄々を捏ねる長谷部君。当然、大貫さんから指導が入る。



お土産用に採集した極上ウド。強欲者ではないとの主張は不可能な収穫量。ちなみにすべて私が気合で担いで下山した。

今回もなんだかいろいろあった釣行だが、天候にも恵まれて本当に楽しい釣行となった。黒須君には命を救ってもらったし、大貫さんには今回もまたいろいろなことを教えてもらった。本当に感謝しているし、何より一緒に釣行させていただいてとても楽しかったです。是非またご一緒させてください。長谷君は、一緒に釣行する機会がもしまたあったとしたら、その際はよろしくお願いします。

それにしても、渓遊会での釣行に参加する度に、勇気を出して渓遊会に入会して本当によかったと思う。私は基本的に1人の時間が好きで、何をやるにも、特に釣りについては単独行動を好む(同行者が増える分、自分の釣果が減少するため。)のだが、この趣味を突き詰めていくと様々な局面で1人での限界にぶつかることとなる。渓遊会に入会する際に、集団での釣行になることで諦めなければいけないものがあるだろうと思っていたが、実際には諦めたことなどほとんどなく、得ることの方が遥かに多いと感じている。最近では引退後に趣味がなくて困っている人や、自分の好きなことが分からない人が増えている、というような記事を見かけることが多い。そういう記事を読むたびに、私は本当に恵まれていると思う。渓遊会で知り合えた仲間のおかげで、おそらく向こう30年は楽しく過ごせそうだ。

